自分以外全員他人

装丁　佐々木俊（AYOND）

自転車を購入するのはちょうど十年振り、東北の地震の直後、計画停電の影響で電車の本数が少なくなったのを機に、三駅先の職場への通勤手段として購入して以来だった。その時に買ったのは一万円ちょっとの紺色のシティサイクルで、ママチャリほど野暮ったくはないもののペダルが重く、変速機能も付いていなかったため緩めの上り坂でも降りて押さなくてはならないという不便な代物だった。見た目よりも実用性で選べばよかったとすぐに後悔したが、そのうち電車も通常通り運行するようになり、結局その自転車で通勤したのはほんの三、四回、それからは少し遠めの公園に出かける時に使用するくらいで、数年後、引っ越しを機に市役所に引き取ってもらった。

その時の思いが残っていたのか、今回私が選んだのはママチャリでもシティサイクルでもなく、クロスバイクという種類の自転車だった。去年まで同じ職場で働いてい

た恩田さんが、ロードバイクを始めてから鬱が良くなったと言っていて、それまではいつも暗い顔で息も臭かったのに、毎日片道一時間かけて自転車で来るようになってからというもの、表情は生き生きとなり、口臭も気にならなくなった。冬になり、自転車に乗らなくなってからまた鬱が再発し結局職場を辞めてしまったけれど、その間だけでも楽になれるならと、すがるようにして私もこのたび自転車の購入に踏み切ったのだった。

恩田さんが乗っていた自転車は十万円もする物らしく、それでもロードバイクとしては安い方だと言っていて、そんなには出せないと思いながら手頃な物をネットで探していた時に見つけたのがクロスバイクだった。初めて聞く単語で、調べてみると、クロスオーバーバイクとも呼ばれ、ロードバイクとマウンテンバイクを融合させた性能を持つ自転車、ということだった。速く走れるようロードバイクの作りを踏襲しつつ、町中の段差やちょっとした未舗装路も安定して走れる太さのタイヤを備えています。値段も三〜八万円程と、スポーツバイクとしては比較的安価な価格帯で購入可能です。

安くても三万円。ママチャリならその半分以下で買えるのに、と一瞬セコい考えが

頭に浮かんだものの、また似たような失敗はしたくなかったし、恩田さんの言っていた、風と一体になる爽快感、というのも少しは味わえるのではないかと思い、私はその日、高円寺駅高架下にあるサイクルショップへと向かったのだった。

店内には様々な自転車が種類ごとにびっしりと並んでいて、私はクロスバイクのエリアの前で一台一台車体と値札を確認していった。一番安い物でも四万円近くして、値段が高い物の方が見栄えが良く作りもしっかりしていそうだったが、私はぎりぎり三万円台の物の中からなるべく心にしっくりくる物を選んだ。オフホワイトのフレームにマットブラックのハンドルは落ち着いた雰囲気があって良いと思った。初めから買うつもりだったダイヤル式のカギの他に、サドルの盗難防止用のカギや、防錆効果のある潤滑スプレーなどを店員に薦められるままに購入し、盗難保険や自賠責保険に加入すると、すべて合わせて五万円を超えた。

サドルの位置は一番低く調整してもらったものの跨るとつま先立ちにならざるを得ず、店を出て家に帰る途中、信号で止まるたびにぷるぷるして恥ずかしかったが、自宅手前の信号で止まっている時、車体を傾ければ地面に足がつくことに気付いた。周りのスポーツ系の自転車に目をやると、サドルから腰を下ろしフレームに跨るように

して停車している自転車もあり、いろいろなやり方があるものだなと感心した。今まで街中で自転車を見る機会はあったのに、それに気付くことはなかった。何かを発見したり、それまでとは違う視点で世界を見るという感覚は久しぶりのことで新鮮だった。

ほんの数分の移動だったが、当然歩きよりも格段に楽で、坂を下っている時は特に気分が上向くのを感じた。しばらくは通勤専用になりそうだったが、慣れれば恩田さんのように長い距離を走ってみたいと思った。

マンションの駐輪場は前もって契約していた。築二十五年のワンルームマンションは六階建てで、ワンフロア六部屋ずつあるから満室で三十六人の人間が入居している計算になるが、駐輪場は九台分の置き場所しかなかった。白い枠線で仕切られている区画がその数しかなく、枠外のスペースに停められないこともなかったが、そうすると自転車の出し入れがスムーズにできなくなる、そんな狭い駐輪場だった。幸い、夜になるとどうかわからないものの、今は三台しか停まっておらず、壁の庇の下に一台、屋根の下の四台分の区域も真ん中に二台置かれているだけだった。利用者それぞれに停める場所が割り振られているわけではなく、管理会社と契約を結び、利用者の証で

ある駐輪ステッカーを貼りさえすれば空いている場所のどこにでも停めていいということだったが、余計な恨みは買いたくなかった。図書館やサウナなどの公共の施設でもそうだが、いつも座っている場所を勝手に自分専用の場所とし、そこを使われたら嫌がらせをしてくる頭のおかしな人間というのはどこにでもいる。しかもこのご時世、そういう人間に出くわす確率はきっと日に日に高まっているはずだった。

先着順で置く場所を好きに決められる、というのであれば何の不安もなかったが、管理人が常駐しているわけでもない安い賃貸マンションの、しかも月ではなく年間千円の駐輪場代では、何の文句も言えるわけもなかった。

新品だから余計に、当然雨は避けたかった。屋根の下の右端の区画に自転車を停め、しっかりとケーブルロックをかけると、私はいったん部屋に戻り食事と風呂をすませた。夜に再び駐輪場に行くと、昼間同様私の物を含め四台の自転車が置かれているきりだった。念のため早朝にもまた見に行ってみたが同じ光景を目にするだけで、どうやらここで問題ないようだと、私は自分の置き場所が決まったことにとりあえずほっとした。

「もうすぐ暖かくなりますし大丈夫ですよ」

オーナーの押尾はそう言って、私の訴えをさらりと流した。最近精神的にしんどくて、いよいよ限界だと思うので来月いっぱいで辞めさせてください。もう十回は超えたに違いない退職願い。そのたびに、「改善します」とか、「努力します」と実際に動いてくれたり、「柳田さんがいなくなると寂しいです」と情に訴えられたりもしたが、手持ちのネタが尽きたのか、押尾は私の心変わりを、ついに気候に委ねた。暖かくなればなぜ大丈夫なのか、私には分からない。元々敏感な性格で、入店当初から他のスタッフや客の言動にストレスを感じてはいたけれど、昨年コロナ禍になってからはさらに精神が不安定になり、カーテンの乱暴な開け閉めの音が、床を蹴りつけるようながさつな足音が、粉々に砕かれたガラスの破片のように心に飛んで来ては、雑なベッドメイクを見るたびにげんなりして生きる気力を失った。たかがそんなことで、と人に言えば鼻で笑われるだろうし、余計な波風も立てたくなかったから黙っていたが、初めて退職願いを申し出た時、辞めたい理由を訊かれたので仕方なく押尾には話したところ、押尾は、「飲みに行きましょう」と言っただけで、私の悩みに直接触れてくることはなかった。単に気分が滅入っているだけだと思われたのか、そういうのは酒

でも飲めば忘れられる取るに足らない悩みであると言われているような気がした。そんなふうにして人はみんな生きていて、それが生きるということなのだろうかと、コロナ前は酒席に参加したり、他人の言動を気にしなくなれる方法の書かれた本を読んでみたりもしたが上手くいかず、三回目の訴えで押尾は私の思いを反映させた店内ルールを作成し控え室に貼ってくれたが、初めのうちこそ改善されたものの、時間が経てばまた元通り、結局は人を変えるより自分を変えるしかないという結論に至るも、変えられないままに五年の時が過ぎた。

高円寺に越して来たのは六年前。一年間はそれ以前から働いていた浅草の店に通っていたが、親しくしていた人たちが次々と辞めていき、片道一時間かけて通う理由も無くなった頃、新たな職場は近場で探すことにした。ちょうど隣の阿佐ヶ谷にある店が求人募集を出していた。都内でたまに見かけるチェーン店で、ちょっとした受け答えと施術チェックだけで即採用となった。即採用、というのが少し不安だった。その店舗はフランチャイズで、オーナーの押尾は色黒で大胸筋が盛り上がっていて、金色の太いネックレスもしていたからもしかしてヤバい店なんじゃないかと思ったけれど、案外そんなものなのかもしれないとも思った。マッサージ業界に身を置くようになっ

て五、六年経ったあたりから、六十分三千円という、それまでの半額の価格帯の店が増え始め、それくらいの値段なら試しにと新たな客層が生まれたり、元からの利用者がその頻度を上げたりと、需要が増えれば当然供給も増やさなければならず、どの店も人の確保に頭を悩ませているようだったから、よほど変な人間でない限り採用のハードルは以前に比べ相当低くなっているのだろう。その反面、昔ながらの価格帯の店は客離れが進み、歩合制の店の場合稼げないから需要の高い格安店へと鞍替えする人は多かった。浅草の店もそのような理由で人が離れていった。

採用を告げた後、押尾はしきりに来客数の多さや、他の店舗に比べ歩合率も高めに設定してあるという意味のことを話し、店を出る時には、他に面接の予定とか無いですよね、と念を押すように訊いてきた。

無いです、と答えると、押尾はほっとしたように不自然なほどの白い歯をのぞかせた。稼げる店だということをアピールしたかったのだろうが、私はそれよりも、チラシ配りが無く、支払いは券売機で、施術や雑用以外の空いている時間は何をしていてもいいというところに魅力を感じていた。

思っていた以上に店は忙しかった。私が入ったのは四月の末で、ちょうどゴールデ

ンウィークと重なったため毎日土日並みの混み様だった。平日の暇な時間帯に客の案内や受付業務を教わり、慣れてから土日を迎えるというのが理想だったが、出勤するとすでに私の分の予約が入っていて、店長から一度接客マニュアルを口頭で伝えられただけで後はすべて自分でこなさなければならなかった。といってメニューがいくつもあるわけではなく、カルテの記入やポイントカードの作成などの手間も無かったので仕事自体にはすぐに慣れた。ただ、十分のインターバル以外ほぼすべての時間が予約で埋まるのは、ぎりぎり生活していけるお金さえ稼げればそれでいい私にとって望ましいこととは言えなかった。もちろんぎりぎりの生活費すら得られないよりかはマシだったが。

　他のスタッフとプライベートな話をする時間的な余裕ができたのは入店して半年後、客足が若干遠のいた頃だった。肌寒くなったのと、近隣に似たような価格帯の店が何軒か増えたのが原因だった。忙しかった頃よりも一日に入る本数が一、二本減り、月にすると五万円程収入が少なくなったが、独身で恋人も無く、金のかかる趣味も無い私にはそれでも十分な収入だったし、むしろ体が休まるからそちらの方が良かった。店長の新谷も、奥さんが看護師で自身もパチスロで月に十万円程の副収入があるため

その状況を喜んでいたが、キャバクラ通いが趣味の渡辺や、マッチングアプリで知り合った福岡の女性と遠距離交際中の大竹は、しょっちゅう不満をもらすようになった。施術に入る順番について、それぞれ自分が多く稼げる形へのルール変更を求めたり、暇なのに残業して一本でも多く入ろうとした。そうすると当然他のスタッフが稼げなくなるが、そんなことにはまるで頓着していないようだった。お金のことよりも、そういう自分さえ良ければいいという考えが私には不快だった。そのうえ二日酔いで遅刻してきたり、安い航空チケットが手に入ったからと急遽シフトに穴を空けたりもするものだから余計にイラついた。他のスタッフから不満の声が上がり、押尾から注意を受けても二人の態度があらたまることはなかった。人手不足でクビにはなるまいと高を括っていたようだが、なら自分が辞めますと比較的まともなスタッフから言われるとさすがに押尾も彼らを切らざるを得なかった。

「前はもっと変な奴もいたんですよ。客とケンカしたりセクハラしたり。スタッフの財布から金盗んで警察沙汰になった奴もいたし」

週に一度、営業終了間際に券売機の両替をしにくる押尾は、店に私だけが残っている時、そのような愚痴をこぼした。

「そういうこと何度も経験してると、一目見ただけでそいつがどういう人間かある程度分かるようになるんですよね。でも変な奴でも取らなきゃならない状況の時もあって。だから柳田さんが面接に来た時、久しぶりにまともな人が来てくれたって嬉しかったんですよ。仕事も一番ちゃんとやってくれてるし」

がさつなスタッフや偉そうな客にうんざりし、辞めたくなってもその都度踏みとどまることができたのは、ただ普通に働いているだけでそんなふうに評価してもらえたからだ。何の努力も必要ではないから楽だった。けれどそんなぬるま湯に浸かり続けるうち、いつの間にかどこにも行けない体になっていた。また一から仕事を覚えたり、人間関係を構築することを考えると恐くて震えてくる。出たいのに出れないジレンマが、このところの神経症に拍車をかけたのだろうか。押尾の言うように、自分は本当にまともな人間なのか、私にはもうまるで分からなくなっていた。

しばらく雨が続き、ようやく天候に恵まれたのは自転車を購入して五日後のことだった。頭上には抜けるような青空が広がっていて、一日を通して晴れの予報だった。自宅から職場までの道のりを、今日は自転車で辿ることになる。人通りが少ないから

ほぼ毎回利用していた桃園川緑道は、自転車の進入を禁止していたためそこを避けたルートに変更する必要があったが、もう六年も暮らしている街だからだいたいの道が頭に入っていた。私が重要視していたのはそこにどんな店があるかとかではなく、いかに人に出くわさずにすむかということだった。だから駅前には滅多に行かなかったし、その辺りの店に入ったこともほとんど無かった。

今の職場で働くようになって、しばらくの間は電車を利用していたが、すぐに徒歩通勤に切り替えた。理由は、乗客のマナーの悪さにどうしても慣れることができなかったからだ。

行きはまだよかった。周りの人間に配慮せず、イヤホンから大きな音を漏らしていたり、携帯で電話をしている人間をたまに見かけるくらいですんだ。けれど帰り、高円寺駅で降りる時は必ずと言っていいほど降りる前に乗り込んで来る人間に遭遇した。ドアの真ん前で降りる素振りを見せているのにも関わらず、肩で押し戻すようにして乗り込んで来た。若くても年を取っていても、男でも女でも、酔っている場合もあったしそうでない場合もあった。そのたびに私は怒りにかられ、思わず手が出そうになるのを必死で堪えた。エスカレーター付近は混雑するからそこに停まる車両を避ける

などの対策を取ったこともあったが、何故マナーを守っている自分がそこまでしなくてはならないのかと思うとさらに怒りは募り、改札前でたむろして騒いでいる集団を避けたり、キャバクラやガールズバーのキャッチをかわすのも面倒だったので、いっそ歩いた方がマシだと思った。

自宅から職場まで、歩きだと三十分かかった。元々散歩は好きで、節約もかねて休みの日は片道一時間くらいの距離なら普通に歩いていたが、仕事前と後の三十分は、それが毎日ともなると苦痛だった。精神的に落ちている時は、途中でしゃがみ込んでもう一歩も動きたくない気分になることもあったし、帰りはアルコールの力を借りながらでないと歩けなかった。それまで飲酒の習慣は無かったのに、毎晩アルコール度数の高い缶チューハイを飲むようになった。夏場は汗だくになるから、なるべく行きだけ電車を使うようにしていたが、コロナ禍になってからはそれも完全に無くなり、替えのTシャツとボディシートは必ずリュックに忍ばせておかなくてはならず、忘れた時の自己嫌悪感といったらなかった。執拗に自分を責め、いたずらに傷つけた。けれどもう、今後はそれらのことに悩まされる心配は無くなる。

駐輪場から手押しでマンション前の細道に出て、大久保通りにぶつかったところで

サドルに跨った。まだ慣れていないのでバランスを取るのが難しく、ちょっとしたひょうしに倒れそうで恐かった。左右を何度も確認してから車道を横断し、左側の自転車レーンを走行し阿佐ヶ谷方面を目指す。路上駐車の車がいくつかあったため、そのたびに車道側へはみ出さなくてはならず、対向車との間を通る時は十分な余裕があるはずなのに、なぜかひやっとした。二車線の道路から一方通行の道へ入ってからは比較的気が楽になったけれど、それでも脇道にさしかかるたびに子供や猫が急に飛び出してくる不安が頭をよぎり、周りの景色を楽しんだり風の匂いを感じたりする余裕は無かった。阿佐ヶ谷駅前の駐輪場に着いた時は心底ほっとするくらいで、とても恩田さんの言うような感動を味わえるような気はしなかったが、スマホで時刻を確認すると家を出てから十分しか経っておらず、腕と背中にこわばりを感じはするものの疲労感は一切なく、なぜかズルをしているような罪悪感すら覚えた。大袈裟かもしれないが、感覚的にはどこでもドアを手に入れたような気分で、帰りも一瞬で家に着き、習慣と化していたアルコールが欲しくなることもなかった。自転車通勤にするだけでこんなにも楽になれるのなら、安いママチャリで十分だったんじゃないかと思ったが、けれどそれはほんのささやかな恩恵にすぎなかった。

初めはそうでもなかったのに、むしろ最初の印象が低かったり悪かったりする方が、その良さを知ってしまうとどんどんのめり込んでいくものだというのは過去に何度も経験したことではあった。未だ通勤と休みの日に近所のスーパーに買い物に行く時に乗るくらいで、時間にして一回十分程度のドライブではあったが、ギアを上げ重くなったペダルを踏み込み加速する時の、ぐん、という手応えと疾走感。ゆるい下り坂をノーブレーキで、ハンドルではなく車体を傾けることによって脇道へとカーブする時の、一瞬ジェットコースターを思わせるぞわっとした感覚は癖になった。

職場は相変わらずつまらなかったものの、帰りの自転車を思えば何とか気を紛らすことができた。先月押尾に退職願いを申し出た頃は常に喉に何かが詰まっているような感じで息がしづらく、些細なことでスタッフや客にイラッとしてはそれを表に出さないよう必死に堪えていたが、最近はそんなこともなくなり、何故あんなことで腹を立てていたのかと逆に不思議に思うほどだった。簡単に言えば余裕が無かったのだ。人生の楽しみがまるで無かった。コロナ禍になってからはひとりカラオケもスーパー銭湯も行けなくなったから、幸せそうな人間が余計に妬ましく、そのうえ周りの迷惑もかえりみない身勝手な振る舞いを見せられると尋常でない怒りを覚えた。

押尾の言うように、暖かくなったから、というのも症状の改善にいくらか影響をもたらしてはいるのだろう。体が冷えると自律神経の乱れからイライラしやすくなるのは医学的に大抵の人に当てはまる確かなことなのだろうし。けれど一番の問題は楽しみが無いということで、その苦痛を和らげるための、目を背けるための楽しみがあるうちは何とか誤魔化していられるのかもしれない。だからそのために世の中にはいろいろな娯楽があり、人はいろいろなことをするのだ。良くも悪くも。時にそれが破滅へと繋がるものであったとしても。そういう劇薬に手を出す可能性はきっと自分にもあった。だからその前に自転車に出会えたことはラッキーだったと私は思う。

梅雨時はあまり自転車に乗ることができず、またしばらくは気分が沈みがちだったものの、梅雨が明けたら出かける場所をあれこれ想像することで何とかしのいでいた。独り身で大した苦労もなく、ただ生きているだけなのにしょっちゅう精神を病んでしまう自分が情けなかった。ただ生きているだけだからそうなってしまうのだろうか。あの時夕子さんと結婚していたら、彼女が望むように子供を作っていたら。幾度となく繰り返したその自問に対する答えは、彼女と別れて八年が過ぎた現在でも変わらな

い。遅かれ早かれそのプレッシャーに耐えかねて、逃げ出すか発狂していたに違いない。勘違いしていたのだ、自分でもちゃんとやれると。初めて恋人を得、一緒に暮らしたことで人並になれたと思っていた。けれど東北の地震や失業によって、また元の臆病な自分に戻った。将来に不安しか持てず、このまま一緒にいたら彼女を不幸にするだけだと思い、自分の方から別れを切り出した。

別れてすぐに後悔したが、その時にはもう、電話もメールも繋がらなくなっていた。あの不安な状況の中で、彼女を支えられなかったのだから当然だった。私は自分にできる範囲内でしか彼女を大切にできず、彼女のために変わろうとはしなかった。彼女を幸せにできる他の誰かにそれを託し、それを優しさだと勘違いしていた。

同棲を解消してからもそれぞれ駅の西口と東口で暮らしていたから、たまに駅のホームなんかで見かけることがあった。声はかけなかったが、細い糸でもまだ繋がっていると思っていた。またいつか元に戻れるという微かな希望は二年後、男と手を繋ぎ電車を待つ彼女の姿を見た時に完全に消えた。そうして私は、二度と彼女の人生の邪魔にならないよう、縁もゆかりもない遠い街へと引っ越した。

生きる支えや希望などもうとっくに失ってしまったが、最低でもあと一年半は生き

なくてはならなかった。来年の十月になれば、自殺でも死亡保険が下りるからだ。

数年前から、四十五歳が限界なんじゃないかと思っていた。それは単なる自分の体感でしかなかったが、その体感も様々な人の体験を構成して作られたものだった。二十代の頃は、三十越えたら早いよ、と教えられ実際にそうなったし、四十になったらいろいろ出てくるよ、という助言もまた本当のことだった。まず髪の毛が薄くなり、目尻や額のシワが目立つようになった。体力が衰えたことで運動が億劫になり、その結果体重が十キロ増えた。肌にも若干ゴム感が出てきたし、毎日何も面白いことが無いから笑うことがなくなり、コロナ禍になってからはマスクで隠れているのをいいことに不機嫌な顔を抑えることもなくなったから人相も悪くなった。その悪い顔を毎日鏡で見ていると、日頃の尋常でないイライラも加味されて、このままだと自分は近い将来犯罪者になるかもしれないと思い込むようになった。そうなる前に死ななくてはならない。家族に迷惑をかけるわけにはいかなかった。母親や姪っ子に何もしてやれなくなる分、せめてお金を残すことにした。保険の規約によると、三年以内の自殺の場合保険金は支払われないことになっていた。加入した三年後がちょうど四十五歳だった。私はそのことに運命を感じた。

梅雨が明けた最初の休日、初めてのサイクリングは井の頭公園に決めた。電車や徒歩でも何度か行ったことがあったから、道のりはだいたい頭に入っていた。

環七通り沿いの広めの歩道を、とりあえず青梅街道目指して走る。まあまあの上り坂なのに、ギアを軽くすれば降りることも立ち漕ぎすることもなく進むことができて、私はそのことに小さな感動を覚えた。坂の頂上で青梅街道にぶつかり、左側通行を守るため信号を渡ると、今度は吉祥寺方面へと自転車を走らせる。青梅街道沿いの歩道は、環七通り沿いの歩道ほど広くはなかったので、前に複数の人がいるとスムーズに追い越すことができなかった。歩道の真ん中を歩く人や、横並びで歩くカップルなんかがいて邪魔だったが、本来自転車は車道の左側を走らなくてはならないと交通法で定められているため、今の自分に腹を立てる資格は無かった。車道の自転車レーンは路上駐車の車でひしめいていたので、歩道を走行するのもやむなしという状況ではあったし、ほとんどの自転車が徐行運転を心がけてはいたけれど、中には歩行者に執拗にベルを鳴らして威嚇したり、猛スピードで逆走してくる自転車なんかがいて、危うくぶつかりそうにもなった。ルールを守らない上にあつかましいその態度にムカつき、「左側通行だろ！」と怒鳴りたくなったが、仮にそうしたところで逆ギレされるだけ

だろうし、もしもカッときて手を出そうものなら、裁かれるのは自分の方だった。車道に出たら出たで自転車レーンからはみ出ないよう走っているのにわざとらしく幅寄せしてくる車がいるし、どこに行ってもどの立場になっても、生きている限り自分は損するようにできているんだと私はあらためて思い知った。

心の中で悪態をつきながら、実際にマスクの中で叫びながら、ロータリーや建ち並ぶビルのせいで混雑する荻窪駅前をなんとか通り過ぎ、しばらく進んだあたりでようやくひとごこちついた。まだ半分しか来ていないというのに先が思いやられた。ストレス発散のつもりが余計に募らせ、帰りのことを考えると憂鬱だったが、今はとにかく進むしかなかった。

だんだんと交通量が減り、歩行者の姿もちらほらとしか見かけなくなったあたりから、少しずつ胸が落ち着いてきた。喧騒から離れれば離れるほど気持ちが穏やかになっていく。都会での暮らしが自分にとってどれほどストレスになっているかという証拠だった。けれど田舎は田舎で人との距離が近すぎてそれはそれで煩わしい。どこにも理想的な場所なんて無いのかもしれない。妥協しながら生きるには、生に対する執着が弱すぎた。

吉祥寺駅のアトレという商業施設で、崎陽軒のシウマイ弁当を買い、井の頭公園のベンチでそれを広げた。池の前のベンチが空いていて、手漕ぎボートやスワン型のそれがゆったりと水面を滑り行くのを眺めながら、シウマイや甘く煮た筍、俵型のごはんに箸をのばす。メインのおかずは当然、箸休めの昆布や紅ショウガも美味しかった。咀嚼したそれらを、自販機で買った冷えた麦茶で流し込む。やわらかな木漏れ日に顔を照らされて、私は素直に幸せだと思った。その幸せな気持ちも、帰りの道中マナーの悪い自転車や車に遭遇するうちに消えてしまったけれど、その何気ない幸福感は癖になり、それから私は休みのたびごとに自転車で様々な場所に出かけるようになった。

初めのうちは片道一時間くらいで行ける公園を巡った。代々木公園は渋谷の雑踏が危なくて一度しか行かなかったけれど、背の高い木々に囲まれたサイクリングコースは下りだと漕がずとも結構なスピードが出るので、バイクを運転しているみたいで楽しかった。上野公園は以前松戸に住んでいた頃によく行っていたので懐かしかったが、新大久保のごちゃごちゃした通りを通過しなくてはならなかったため二度しか行かなかった。世田谷の砧公園は子供用の遊具が充実しているためか親子連れが多く場違いな感じもしたけれど、代々木公園と似たようなサイクリングコースがあったので三回

行った。練馬の光が丘公園は入り口の広場や幅広のプロムナードが開放的で、映画の舞台のような雰囲気もあり好ましく、ここには四回行った。そのうち草木だけでなく川も見たくなり、上京してしばらくの間住んでいた調布の街も久しぶりに見たかったので多摩川に行ってみたところ、調布駅から真っ直ぐに南下したエリアが小さなダムになっていて、八月の炎天下にその光景はあまりに魅力的で、土手を下りて柵を越え、目の前で流れ落ちる水や、コンクリートに砕かれ白く泡立つ激流を眺めそのしぶきを浴びながら、全方位サラウンドの激しい水音を聞いていると癒されて仕方なかった。ずっとそこにいたいくらいだったがとても喉が渇いていたので、これもまた目的のひとつだったガリガリ君梨味を求めコンビニとスーパーをいくつか巡り、国領のヨーカドーに売っていたので店先のテーブルであっという間にたいらげるとさらにもうひとつ買って食べた。

一応日焼け止めは塗っていたものの日に日に黒くなりますます汚くなったけれど、自転車をやめることはできなかった。生活圏から離れ、自然豊かな場所でボーっとすることや、脱水症状を引き起こしそうなくらいに汗をかき、カラカラに渇いた喉に炭酸飲料やガリガリ君を流し込む時の快感といったらなかった。このまま死ねたら最高

なのにと毎回思った。涼しくなればこの喜びを味わえなくなるし、さらに寒くなれば自転車に乗る頻度自体減るだろうから、今のうちに楽しんでおきたかった。

夏の締めくくりに選んだのは、立川の昭和記念公園だった。スマホの地図アプリで都心を経由せずに行ける郊外の大きな公園を、親指で画面をスワイプしながら探していた時にどんと目に飛び込んできたのがそこだった。その圧倒的な存在感に私は惹かれた。片道三十キロ近くあり、これまでのおよそ三倍の距離というのも最後にふさわしいと思った。

八月最後の月曜は、予報によると一日中晴れで、気温も三十五℃近くまで上昇するようだった。翌日からは曇りや雨が続き、気温も下がっていくみたいだったので、その日が最後のチャンスと言ってよかった。ちょうど公園で昼ごはんが食べれるよう逆算し、八時半に家を出た。

方向的に荻窪吉祥寺を通過しなくてはならなかったので、繁華街では大いにイライラさせられた。狭い歩道を横並びで歩くカップル、真ん中をよたよた歩く老人、急に立ち止まるおばさん、逆走してくる自転車。歩行者は仕方ないとしても自転車とは立場が同じなわけで、しかも逆走しているのだからそちらが譲るのが筋だろうと思うも、

まるでそんな素振りも見せずに猛スピードで突っ込んでくるものだからこちらが譲るしかなく、そのたびに胸がムカムカした。そんなふうにストレスを抱えながら何とか公園なり川なりに辿り着いてほっと息をつく、というのがこれまでのパターンだったが、その日はまだ目的地に着く前から、すっと胸が軽くなった。

小金井のあたりにさしかかった所だった。私はふいに、心が開放されるのを感じた。それは気のせいではなく実際に、空が開け景色が広がった。高い建物が急に無くなり、道幅も広くなった瞬間だった。車も人も視界から消えて、まるで違う世界に入り込んだ気分だった。そこには何の不安も恐怖も無く、怒りも後悔も自己嫌悪も無かった。ただ、自分、という感覚だけがあった。どこまでも広くて青い空の下、ただそれだけがあった。その時私は、自分が本当に求めているものを知ったような気がした。

立川駅のエキュートという商業施設で、定番の崎陽軒のシウマイ弁当を買うと、私はそれを昭和記念公園内の噴水前のベンチで食べた。たくさん汗をかいたので塩分と麦茶が死ぬほど美味しかった。帰りもたくさん汗をかき、途中のコンビニや自販機で５００mlの飲み物を三本買って飲んだのに、家に着いて体重計に乗ると、行く前に計った時より三キロも減っていた。ほとんど水分が抜けた分に違いなかったが、それに

してもいい汗をかいたと思う。往復で六十キロなんて、本物の愛好家からしたらまだ序章にすぎないのだろうが、私には分厚い小説を一冊読み切ったくらいの達成感があった。

その日はそれほど疲れを感じてはいなかったものの、翌朝起き上がる時には膝と腰に痛みを感じ、足も胴体もくの字のままトイレに行かなくてはならなかった。走れば走るほど老いが近づいて来るのを感じ悲しくなったが、とはいえ十分な満足感が体の中には満ちていた。

九月半ばを過ぎたあたりから、近所の接種会場での予約も比較的取りやすくなった。不安だった高熱や頭痛といった副反応も、接種の前後にタンパク質やビタミンCを多く摂ることで軽減されるという情報をツイッターで得、私も準備万端整え打つ気でいたが、予約日の前日、これもまたツイッターで、ワクチンを打ってから抜け毛が止まらず禿げた、という画像付きの投稿を見てしまい、反射的に予約をキャンセルした。ワクチンを打てば万が一コロナに感染したとしてもほとんどの場合無症状か軽症ですむという話だったが、禿げたら確実に生きて行けないと思った。支えてくれる恋人で

もいればまだしも、これ以上惨めなハンディキャップを背負いたくはなかった。感染対策には人一倍気をつけているし、電車にもほとんど乗らなければ人が多く集まるような場所にも行かなかった。ワクチンを打ったからといって感染しないわけでも人にうつさなくなるわけでもないというし、近しい人はすでに接種済みだから、これまで通り感染リスクを避けた生活を心がけてさえいれば自分の場合大丈夫だろう、と私は思うことにした。唯一の問題点は職場だった。自分がいくらマスクや手洗いうがいアルコール除菌を徹底していようと、それをおろそかにするスタッフや、素行の知れない不特定多数の客と接しなくてはならない。コロナ禍になってからはスタッフと会話することを避け、接客時も必要最低限の言葉しか交わさないよう気をつけながらおっかなびっくり働いていたが、それもこれもワクチンを打つまでの辛抱だと思っていた。ところがいざ打たないと決めてしまうと、それまでにも増して他人の言動が気になるようになった。

まず、店内のアルコール除菌、換気は私以外誰もやらなかったし、店長の新谷は、休みの日は必ず朝から晩までパチンコ屋に入り浸り、既婚者だが子供のいない樋山は毎週狭いライブハウスで踊り狂っているらしいし、二十代半ばの乙羽は絶え間のない

性欲の波に流されるようにほぼ毎晩ガールズバーに通っていた。その他のスタッフも似たり寄ったりで、そういう話を小耳に挟んだり変な咳をしている場面に遭遇すると、それ見たことかと腹が立ったが、彼らは彼らで互いに気にする様子もなく楽しそうに話していた。

コロナに対する認識が、世間的にどう変わっているのか私にはほとんど分からなかった。テレビはほぼ観ないしツイッターで得られる情報も右か左かというような極端な意見ばかりで平均的なイメージが摑めなかったし、職場の人を基準にして考えるのは違うと思っていた。コロナはただの風邪だとかマスクに予防効果は無いという意見は当初からあったけれど、異端と見られていたその勢力に自粛疲れした人々が加わり、著名人が立て続けにコロナで亡くなったり、それぞれの理由で自ら命を絶った頃に漂っていた緊張感が薄れているのは感じていた。ガス抜きは大事だが、それでも刹那の楽しみを優先させた結果感染し、高熱や呼吸困難に長らく苦しめられるというのは割に合わないと私は思うし、自分が発症しなくても人にうつす可能性があることを考えると、元の生活態度に戻ろうという気にはなれなかった。もしかしたら自分は、人からコロナ脳とバカにされるような状態なのかもしれないと思う時もあったし、いろん

な考え方があるのも分かるが、最低限、他人に不安を与えるような真似はするべきではないと思っていた。だからこそ、私は林のことがどうしても許せなかった。

林はコロナ前からの常連客だった。五十過ぎくらいの背の低い小太りの女で、以前は少しクセはあるものの口数の少ない大人しめの客だった。ところが店が緊急事態宣言にともない一ヵ月半休業し、営業再開したその日にやって来た時は髪の毛を金色に染め、態度も以前とは別人のように横柄になっていた。入り口のドアをバンと開け、受付に座る私に「今からいける〜?」と語尾を伸ばしながら発語すると、「男性スタッフ希望〜」と付け加え、ベッドに案内してからも細かく注文をつけてきて、そのくせ触られたくない場所を尋ねた時には言わなかったくせに足裏を押すと、「痛い！足裏無理だから！」とこちらに落ち度があるような言い方をしてきた。元々親の介護をしているという話をちらっと聞いていたから、そのストレスがコロナ禍で爆発したのかもしれなかったが、だからといって周りに八つ当たりしていいわけではないし、何よりマスクをしてこないというのがイラついて仕方なかった。身体的な問題で着けられないのなら、せめて大きな声を出すのを控えるとか、咳をする時は口元を手で覆うなどの仕草を見せるのならまだ許せたのにそれすらなかった。阿佐ヶ谷在住の乙羽

によると、昼間歩行者でごった返す西友前の歩道を、林が自転車のベルを執拗に鳴らしながら猛スピードで走り去って行くのを見たことがあるということだったし、私も仕事終わりに西友で、マスクをせずに買い物している林を見かけたことがあった。大勢の人の目がある中でそんなことをするということは、もうそちら側で生きて行くことにしたのだろう。ヤバい人間であることを自らアピールすることで、物事を自分の有利に進めようとする厄介な輩。そういう生き方は卑怯だと思う私は、林に対する嫌悪感を日々募らせ、担当する時はもう以前のように愛想良く接することはできなくなっていった。

来なくなればいいのに、という思いを込め素っ気ない態度を貫いていると、林も以前のように大人しくなったが、他のスタッフがへりくだった態度で接すると、またすぐに尊大な態度を取り戻した。そういういたちごっこが一年以上続いたのち、東京の一日の新規感染者数が四千人超えという昨年の十倍以上の数になっても未だマスクをしてこない林にいい加減堪忍袋の緒が切れた私は、押尾に相談し、マスク着用を促すためのポスターを作ってもらった。これまでそれをしなかったのは、林以外にマスクをしてこない客はいなかったのと、周りから陰でコロナ脳とバカにされるのではない

かという不安があったからだったが、今はそんなことを気にしている状況ではなかった。

入り口のドアにでかでかとそのポスターを貼り付け、来店時に口頭でも伝えたところ、次の来店時には林もようやくマスクを着用してきたものの、次の来店時にはまたしてこず、担当したスタッフも何も言わずに受け入れたものだから、以降二度としてくることはなかった。林はますます増長し、スナック菓子を食べながら施術を受けたり、連絡無しで遅れて来ては、次の予約の関係上時間短縮になることを告げると、じゃあ今日はいい、と言って帰るという迷惑行為にまでおよぶようになった。押尾は来店を断ってもいいと言ったが、店長の新谷は事を荒立てずに何とかやりすごしたいという態度だった。私はますますイラついて仕方なかった。客とはいえ何故あんな人間にそこまで気を遣わなくてはならないのか分からなかったし、そんな人間のせいで感染したとしたらたまったものではなかった。自分もそうだが、それよりも岡本さんにリスクがおよぶことが心配だった。

岡本さんは浅草の店で働いていた時の指名客だった。店を辞めてからは自宅への出張を頼まれるようになり、旦那さんの施術もするようになった。月に二回、隔週日曜

日に浅草の彼女の家へと通うようになってからもう五年以上になる。二人とも人柄がよく朗らかで、私のような陰気な人間を快く受け入れてくれた。私もいつしか職場の愚痴やプライベートな悩みを話すようになり、高円寺に越してから今までなんとかやってこれたのもその時間があったからだと言ってよかった。だから二年前、彼女に癌が見つかった時はショックだった。しばらく気持ちが沈み食欲も失ったが、当人はそれほど落ち込んだ様子を見せず、すぐにそれを受け入れると前向きに治療に取り組み仕事も続けていた。だから絶対に、私はコロナにかかるわけにはいかなかった。

個人的な感情は割愛し、その旨を申し送りノートに書くと、私は林をＮＧとした。他のスタッフから顰蹙は買うだろうが、自分の身は自分で守るしかなかった。

厄介ごとがひとつ片付いたことで気が抜けたのか、それからはせっかくの休日にも何もする気が起きなくなり、あんなに熱中していた自転車も当初のような楽しさは感じなくなった。通勤時に乗るくらいで、他に趣味も無いので毎日つまらなく過ごしていたが、十月に入ってしばらく経った頃、感染者数がどんどん減り、このままこの騒動もおさまるのではないかというムードが世間に広まりだした。それは喜ばしいことではあったが、実際のところ、それが本心なのかどうか自分でもよく分からなかった。

自由にどこにでも出かけられるようになったところで、私にはもう、本当に行きたい場所なんてどこにも無いような気もしていた。

大晦日、十時過ぎに乗った電車はがらがらで、大手町で丸ノ内線から常磐線に乗り換えてからも、椅子に座ったまま松戸駅に到着することができた。駅舎を出ると見慣れた景色が広がり、帰って来たのだという気持ちになった。人生で二番目に長い時間を過ごした街だった。建物のひとつひとつにそれぞれ何かしらの思い出があり、見るたびにそれらが自動的に再生されるから、私は沼に沈まぬよう、足早に母の家を目指した。

そこはあくまでも母の家であって、実家という感覚はなかった。そのマンションは母の再婚相手のおじさんが購入したものだったから。十年ほど一緒に暮らしていた時期もあったが、おじさんと気安い関係を築くことはできなかった。むしろその間は険悪で、ちらほらとでも話せるようになったのは、私が家を出て、おじさんが定年退職してからだった。心から寛げる場所ではなかったものの、明日は船橋に住む姉家族もやって来る。正月に家族で集まるのは二年振りだった。久しぶりに姪っ子に会えるの

は楽しみだった。

マンションは長い坂道を上りきり、そこから一キロほど進んだ先にあった。新築で入居してからもう二十五年になる。外壁は十年ごとに塗り替えられているからさほど古さは感じないものの、室内はところどころガタがきているようで、先月も風呂場の天井から水漏れがあり、工事に十万円かかったと母が嘆いていた。

暗証番号は忘れてしまったから、部屋番号で呼び出すと母が出た。オートロックの扉を抜け、エレベーターで六階に向かう。母の住む部屋は五階にあったが、三階から奇数階ごとに廊下が各部屋のベランダになるよう隔て板で仕切られていたため、一旦六階で降りてから短い階段を下りる必要があった。

玄関のカギは開いていた。中に入り声をかけると母が廊下に顔を出した。二年振りに会う母は、マスクをしていたから顔の老け具合は分からなかったものの、少し歩みが鈍くなっているような気がした。

「いらっしゃい、寒かったでしょう？　洗面所にタオル置いてあるから。昼ごはんは食べたの？」

「いや、まだ食べてない。こんにちは、お邪魔します」

手前の洋室の扉は開け放たれていて、床に寝っ転がってテレビを観ているおじさんにそう声をかけると、おじさんはこちらを振り返りくぐもった声で返事をした。洗面所で手洗いうがいをすませ、リビングに向かう。

「そばを茹でたけど食べるね？」

「うん」

そばは老夫婦の口に合うようやわらかめで、スーパーのエビ天もサイズのわりに中身が小さくてあまり美味しくはなかった。それでもきっと、正月価格でそれなりの値段はしたのだろう。そういえば、と思い私は言った。

「ところで、通販のカニはどうだったの？」

食べながら尋ねると、母はとたんにバツの悪そうな表情を浮かべた。やっぱりな、と私は思う。二週間前、突然かかってきた営業電話でカニを買ったということはＬＩＮＥのメッセージで知らされていた。タラバガニとズワイガニが二杯ずつと、松前漬けのセットが普通より安かったから試しに買ってみたということだった。

「生でも食べられるって言ってたのに、もう茹でてあるのが送られてきたがよ。それも小さいのが足だけ。子供たちも楽しみにしてたから、また別の通販で買ったのよ。

そっちはテレビのやつだったからちゃんとしてたけど。絶対に損はさせませんって言ってたくせに、嘘ばっかり」

いつもの被害者口調で母は嘆く。被害者には違いないが、同情はできなかった。

「なんでそんなの信じるの？」

顔も見えない赤の他人の言うことを、どうして信じようとするのか。何年経っても母は、田舎にいた頃の癖が抜けなかった。姉の上司の紹介で再婚することになり、四十代後半で初めて上京し、以来ほとんど専業主婦として暮らしてきたから可能だったのだろう。人を信じることは尊くて、騙すより騙される方がいいと未だに本気で思っているのかもしれない。それが正しい人間の姿だと。そうすることで自分の過去に折り合いをつけているのかもしれなかった。最初の夫がギャンブルで作った借金を、夫が蒸発後何年もかけて返し続けたことや、離婚を切り出した時に、「お前はお嬢さん育ちだから一生騙せると思ってた」と言われたことへの恨みに対する。

「サプリメントの時もそうだけど、そういうのもうやめた方がいいよ」

数カ月前にも母は、コレステロールを下げる効果があるというサプリメントの営業に引っかかっていた。一袋二十粒入りで、一個五百円と言われたので試しに買ったら、

一万円の請求書が付いていたという話だった。
「そんな言い方されたら普通一袋五百円って思うがね。こすいよ、詐欺だがね」
「だから詐欺なんだって。お客様に喜んでいただくのが何よりの報酬ですなんて、嘘に決まってるじゃん」
「分かった。もう絶対買わない。知らない電話番号は取らない方がいいね」
「いやそういうことじゃなくて、上手い話とか甘い言葉は信じちゃダメだってこと。頼むよほんとに」
自分が死んだ後、変な宗教に引っかかってしまわないか心配で、私は厳しめの口調でそう告げるが、そうやって騙されて文句を言うのが母の趣味みたいなもので、それを奪われたら逆に老け込んで余計にお金がかかってしまうんじゃないかという気もした。
子供の頃から大晦日の夜はいつも鍋だった。夕子さんと暮らしていた時もすき焼きと寄せ鍋だった。三回目は無かった。彼女と別れたのは秋だった。今年はコロナのことがあるから念のため個々で食べられるメニューがいいのではないかと前もって提案していた。以前出してもらって美味しかったヤオコーの冷凍エビフライと、近くの市

場で買ったという殻付きのホタテも肉厚で美味しかったのでリクエストすると、ついでにマグロとブリの刺身も買ってくれていた。

「晩ご飯は俺が用意するよ」

そう言って台所に立ったものの、コンロ周りも冷蔵庫の中もごちゃごちゃしていて、何をするにも動きにくく、物の所在をリビングで寛ぐ母にいちいち尋ねなくてはならずモヤモヤした。

「手を拭くタオルがこの辺にあるといいんだけど。キッチンペーパーのホルダーとかも。不便じゃないの？」

「使いにくくてストレスがたまるがよ」

「じゃあ今度１００均でいろいろ買ってくるよ。あと浄水器も。備え付けの浄水器古くて修理できないって言ってたけど、蛇口に付けるタイプのが二千円くらいでニトリに売ってるし、いちいちスーパーで水のペットボトル買ってくるのも大変でしょ。今はまだ大丈夫でも、この先もっと足腰衰えてもくるんだから、なるべく生活を楽にしておかないと。死ぬまで生きるんでしょ？」

最後は変な言い方になってしまったが、聞こえていなかったのか母は、「少し考え

てみる。頼むにしてもコロナが落ち着いてからでいいよ」とだけ言った。生活を便利にすることとコロナが落ち着くことに、何の関係があるのか私には分からなかった。

ダイニングテーブルには母とおじさんが着き、私は少し離れたテレビの前のローテーブルで食事をした。こういう形の方が気楽で良かった。おじさんと話すのは苦手だった。初めて会ったのは十九の頃で、その頃私は新宿のレストランを半年で辞め、鹿児島に帰り市内で一人暮らしをしながらビルメンテナンスの会社で働いていた。一応自立していたし、その歳で素直にお父さんなどと呼べるはずもなく、ぎりぎり未成年だったため提案はされたが籍にも入らなかった。おじさんも社交的な人間ではなく、どちらかといえば無口で偏屈な方でもあったから、お互いに気まずい状態のまま同居が始まり、初婚で友達も少ないおじさんは、結婚すれば賑やかで楽しい毎日が始まると思っていたようだったが、娘はまだしも息子の方は無口で暗く、やたらと金が出て行くばっかりで何もかもが思っていたのと違ったからますます酒に逃げるしかなかった。元々酒癖は悪く、無礼講という言葉を真に受けて早々に出世コースから外れ、同僚からも敬遠され、製パン会社の夜間配送の仕事をしながら長い間一人の生活を続けていた。姉も同居していた頃は話し相手になっていたから少しは気も紛れていたのだ

ろうが、結婚して出て行ってからは現状の不満が抑えられなくなったのか、酔っ払っては私に説教してくるようになった。家を出ようにもフリーターで低収入の私はまず手に職をつけるために整体の学校に通い、就職してしばらく経ってから三十にしてようやくにその家を出た。

定年退職後は酒量が減り、自分でも自覚があるらしく、日本酒を飲むとおかしくなるからと、毎晩発泡酒に焼酎を少し入れた物を飲んでいる。酩酊しては母や私に出て行けと喚いたり、リビングに小便したりしていた時期はもう遠い過去だった。

おじさんにすすめられたので、私も苦手なビールをひと缶だけ飲んだ。今日は大晦日だから発泡酒ではなくビールなのだとおじさんは言った。でも結局いつも飲んでるのが一番旨いんだけどね、貧乏舌だから、と自嘲気味に言うが、その冗談に私は愛想笑いを返すことしかできなかった。最近はもうあまり飲めなくなったと言いながら、アルコールが入ると徐々に目がすわってきて、昔のように拗ねた表情を浮かべながら、政治や世間に対する苦言を呈し始めた。結婚当初から、晩酌の時はいつもそうだった。

「演説はいいから食べなさいよ」

昔のようにそれに付き合うことを、母はもうしなくなっていた。

「人が真面目な話をしてるのに、演説とは何だ、バカにして」
ムッとした表情でおじさんは言った。きな臭いにおいを感じ不安になったが、おじさんは口の中でもごもご言うだけで、昔みたいに怒鳴ることはなかった。
「はいはい分かりました。それより正月明けたら病院行きなさいよ。譲も見てごらんこの人の足を」
母に言われおじさんの足を見ると、足首から先が紫に変色していた。
「腰が痛くて足先まで痺れがあるっていうのにいくら言っても病院に行こうとしないのよ」
「病院とか、そういうのじゃないから」
「そういうのだがね。歩けなくなっても知らんよ」
坐骨神経痛ならマッサージでいくらか緩和させることができる。マッサージしましょうか、と口にしようとした私は、その前に紫色の足が気になり、靴下履いた方がいいですよ、と言い直した。
「いや、靴下は履かない。履いたら負けだから。貧乏な家で育ったからね、こういうパターンなんですよ」

パターン、という言葉はおじさんの口癖だった。
「またわけの分からんことを言って。お風呂であっためてきなさいよ。壊死するんだよ壊死」
おじさんが風呂場に向かうのを見届けると、母はうんざりしたように言った。
「相変わらずでしょ？　何年一緒にいてもわけが分からんがよ。この間もスーパーのカゴに入ってた年賀ハガキを、拾ったと言って持って帰ってきたんだから。店員に届けるでしょ普通」
何年か前にも散歩中、道端に落ちていたスマホを拾ってきて、部屋で弄くりまわしていたら突然画面が真っ暗になって動かなくなったからゴミ箱に捨てていたのを母が見つけたということがあった。なんで警察に届けないんだと問い詰めると、俺も昔財布を落とした時出てこなかったからとおじさんは言った。そういう考え方を恐いと母は言い、その時も私を相手におじさんに対する批難を口にしたが、以前のように、私は母のその意見に賛同することはできなかった。常識に守られながら田舎で暮らし、上京後はおじさんに寄生しながらろくな苦労も経験せず、自分たち母子はぬるい環境で生きて来た。そんな自分たちにおじさんを批難する資格はなかった。

おじさんはパンを運ぶことしか知らなかった。四十年以上ずっとパンを運んできたのだ。毎日同じことの繰り返しなのに、決して楽になることのない日々を耐えきった。仕事とはそういうものなのかもしれないが、自分ならすぐに逃げ出すに違いなかった。繁華街でヤクザに、「おいパン屋！　邪魔だからトラックどかせ！」と怒鳴られて、「すいませ〜ん」とペコペコ頭を下げながら謝ったという話を母経由で聞いた時は心臓がぎゅっとなったし、それを笑いながら話す母を見てどうかしてると思った。

「冷え性が原因のひとつだと自分でも言ってるくせに、靴下履きなさいよ、って何度言っても履かないし、人の意見を全然聞こうとしないのよ。あげくは価値観が違うですまそうとするんだから」

そんなふうになってしまうおじさんの気持ちは分かる。分かりたくなかったけど分かる。ひねくれた人間は、世間と正面から向き合うことができない。悪意ばかりを見てきたから、ふいに向けられた優しさを素直に受け止めることができず、上手く生きられないもどかしさから、誰にも理解されない独自のテーマを持とうとしてしまう。きっと苦しみに耐えること、打ち勝つことが自分の人生の本分だと思うことでおじさんは何とか生きている。

「最後はやっぱり血の繋がった家族だよ」
そういう母の考え方が、私には負担だった。無意識に、それを避けるための言葉が出てくる。
「そういえばさ、こうちゃんはなんで自殺したの？」
近所に住んでいた男の人だった。私が小学二年生の頃に自殺した。話した記憶はほとんどなかったが、いつも笑っている印象の大人しい人だった。車の排気ガスを利用した自殺だった。
「好きだった女の人にフラれたから。なんで突然そんなこと訊くの？」
「別に。何となく気になっただけ。俺もいつまで生きるか分からないからね」
「生きないとダメだがね」
「生きる理由も希望も無いし」
「若いんだからまた見つかるってよ」
「全然若くない。もうきったないただのおっさんだよ」
「ダイエットして、髪型もカッコよくしたらまだ大丈夫よ」
そういうことではない、と私は呆れるように首を振った。

「毎日イライラしながら生きて、いつおかしくなるかも分からないんだから」
「イライラしないように、楽しいことをするのよ。旅行したり、人と会ったりして」
「行きたいところも無いし、分かり合えるような人もいないし」
夕子さんとは分かり合えていたのだろうか。一時でも。少なくとも彼女と一緒なら、どこに行っても楽しかった。
「そんなの当たり前だがね。みんな他人なんだから」
そんなふうに、母はたまにぽろっと本音をこぼした。

翌日、昼前に姉が娘たちを連れてやって来た。大学三年生と高校一年生の姪っ子は、見ない間にそれぞれずいぶん大人びていた。上の子はほとんど大学には通えずリモートで、下の子は希望していた留学も行けそうにないという話だったけれど気落ちしている様子はなく、今やるべきことをやりつつ、楽しいことを見つけながら日々を生きているようだった。しょっちゅう抱っこをせがんできた頃みたいに、自分にできることはもう無いのだと思った。
義兄は今年も来なかった。結婚してから毎年来ていたが、三年前の大晦日、姉と喧

嘩して以来こなくなった。元々夫婦仲は良くなかったけれど、そのいざこざが決定的な引き金となった。家族四人で家の大掃除をしていた時、義兄が拭いた障子から微かな異臭を嗅ぎ取った姉が何で拭いたのか尋ねたところ、コレ、と言って見せてきたのが洗ったばかりの義兄の靴下で、義兄はさらにそれでテーブルを拭いているところだった。信じられない、バカじゃないの、と文句を言う姉に、洗ってあるんだから一緒だろ、と義兄は反論して譲らなかった。水道会社で現場作業に従事する義兄の靴下は、洗っても落ちないくらい臭いの菌が染みついていたのだろう。そういうことを義兄は知らなくて、事あるごとに姉から文句を言われていた。悪気の無いことで怒られることに、いい加減うんざりしたのだろう。自分の周りはどうしてこうも可哀想な人ばかりなのだろうと、私は切なくなった。

姪っ子にはお年玉を、姉には隠れて保険証券を渡した。「コロナのこともあるし自分もいつどうなるか分からないから」と言うと、「まあねぇ」と姉は自身についても考えるように、神妙な様子で頷いた。

姉家族が帰った後、「姉ちゃんに聞いたんだけど」と母が不審げに尋ねてきた。

「あんたまさかバカなこと考えてるわけじゃないよね？」